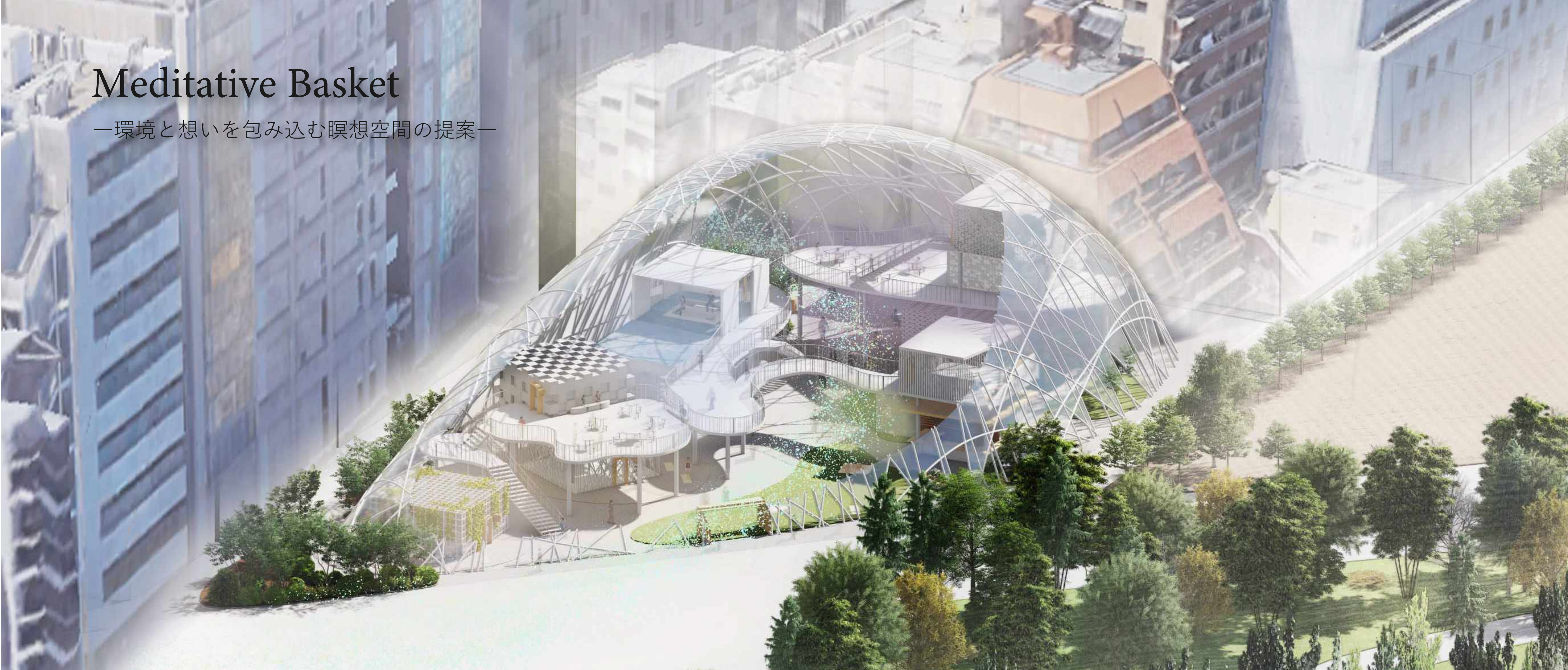


Meditative Basket

—環境と想いを包み込む瞑想空間の提案—



Phase0-0. ストレスとの向きあい方

◆問題提起

情報過多な環境に身を置く現代の人々は、身体・感覚・感性を働かせ活動する場が少なく、心身ともにストレスを感じやすくなっている。情報過多な環境の中の**ストレスとの向き合い方を考えていく必要がある。**

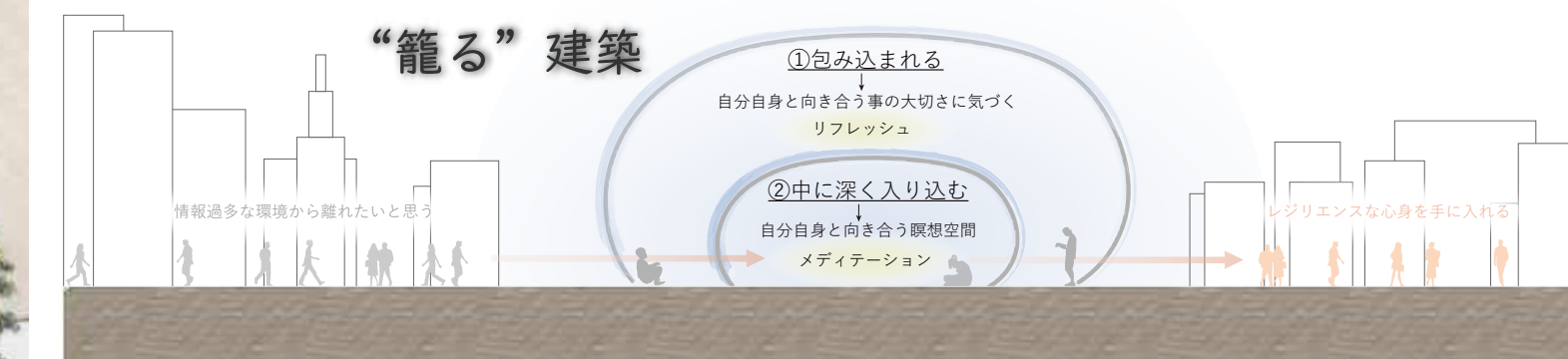
◆提案

スマホなどの自分から離れたものでストレスから逃れるのではなく、自分自身と向き合うことが自身の可能性に気づききっかけとなり、情報過多の環境の中で**ストレスと上手に向きあっていくことが出来るのではないかと考えた。**そこで、自分自身と向きあう行為の1つである『瞑想』を切り口に、**自分自身と向き合う事の大切さに気づき、自分自身の感覚や感性に没入する場を提案する。**

Phase0-1. 忙しい都市生活から“籠る”建築

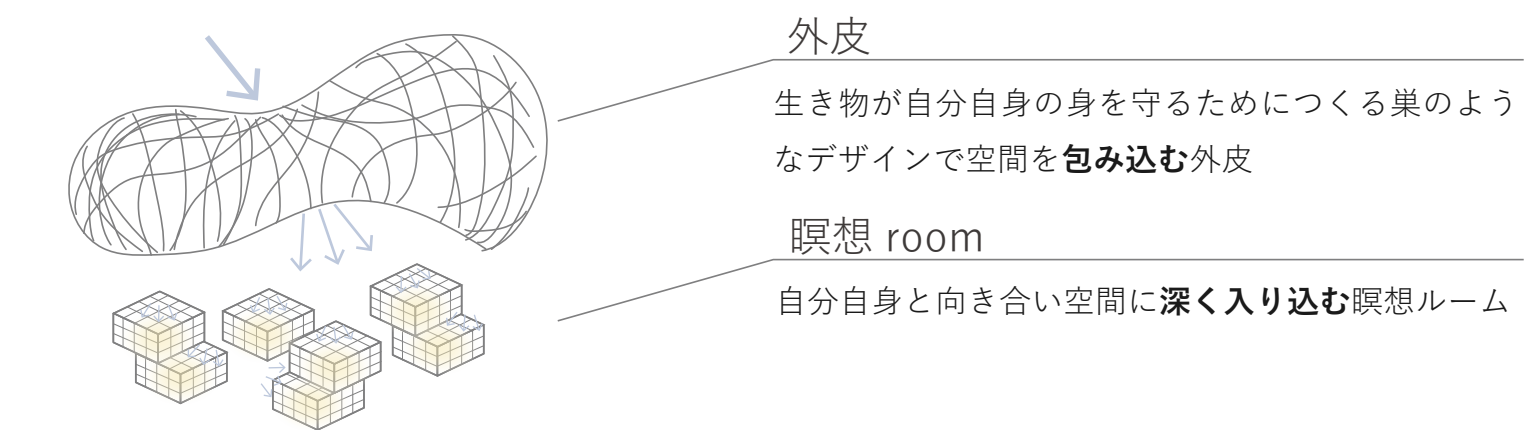
◆コンセプト

多くの情報が取り巻く環境の中で、自分自身の身体・感覚・感性と向き合う為に**忙しい都市の生活から一時的に“籠る”建築**をコンセプトとした。



◆建築構成

自分自身と向きあう瞑想空間をつくるために、生き物の巣の網目の発想から、環境解析を用いて取り込む環境を操作していく。



Phase0 コンセプト立案・更地解析

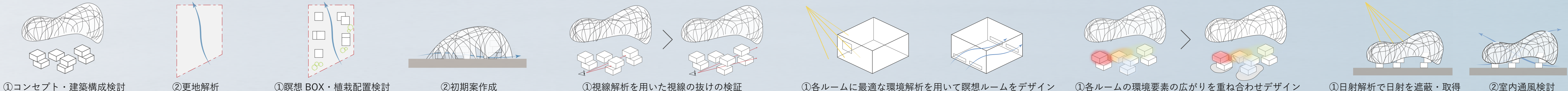
Phase1 初期案作成

Phase2 視線解析による再検討

Phase3 各瞑想ルームデザイン

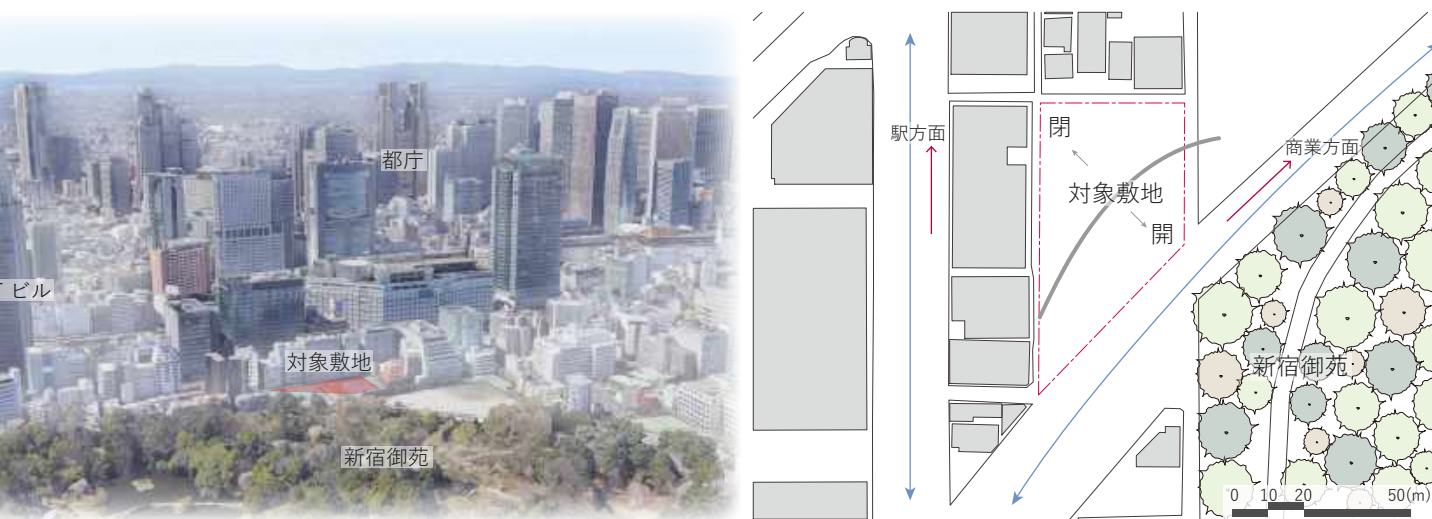
Phase4 中間領域デザイン

Phase5 外皮デザインの最終検討

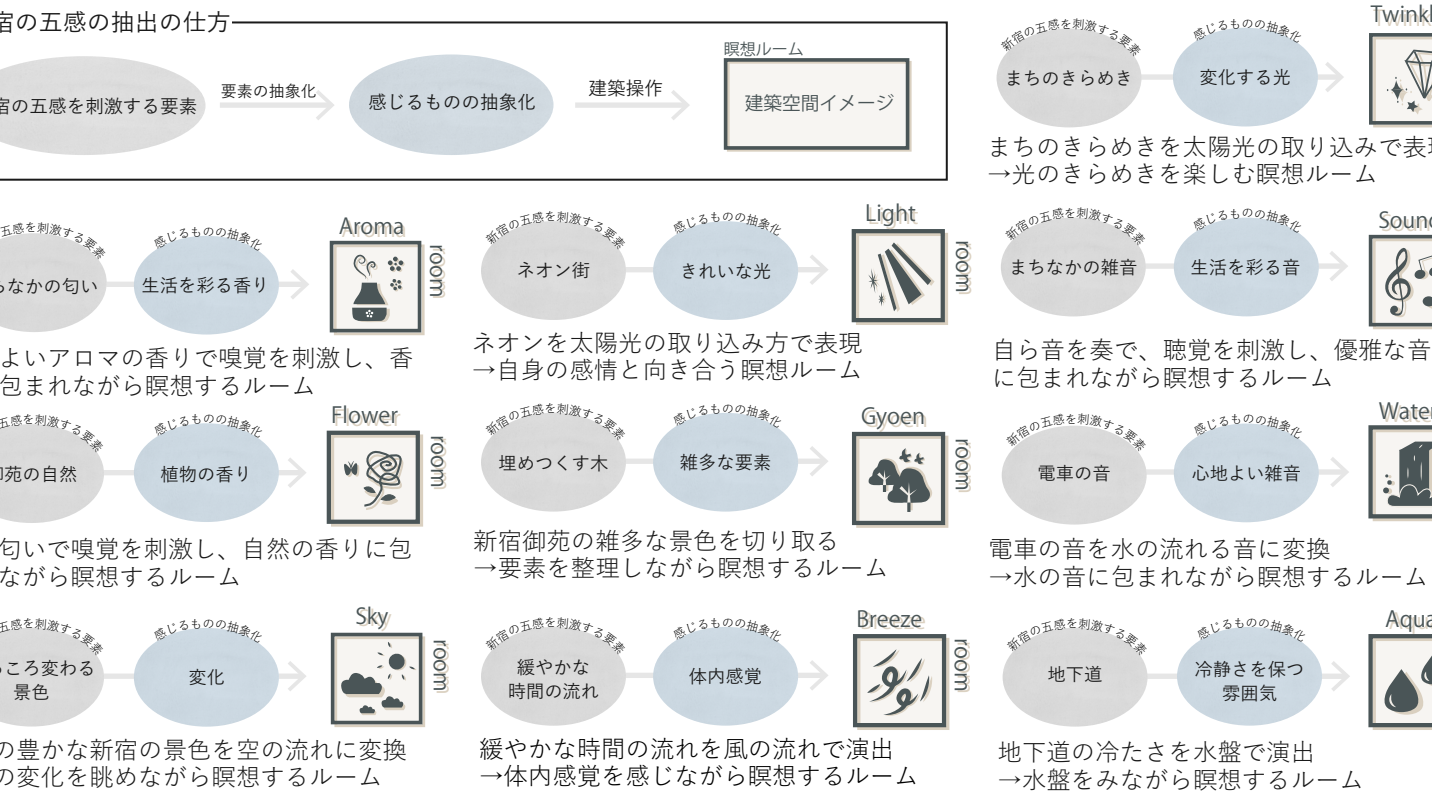


Phase0-2. 五感の刺激による瞑想のデザイン

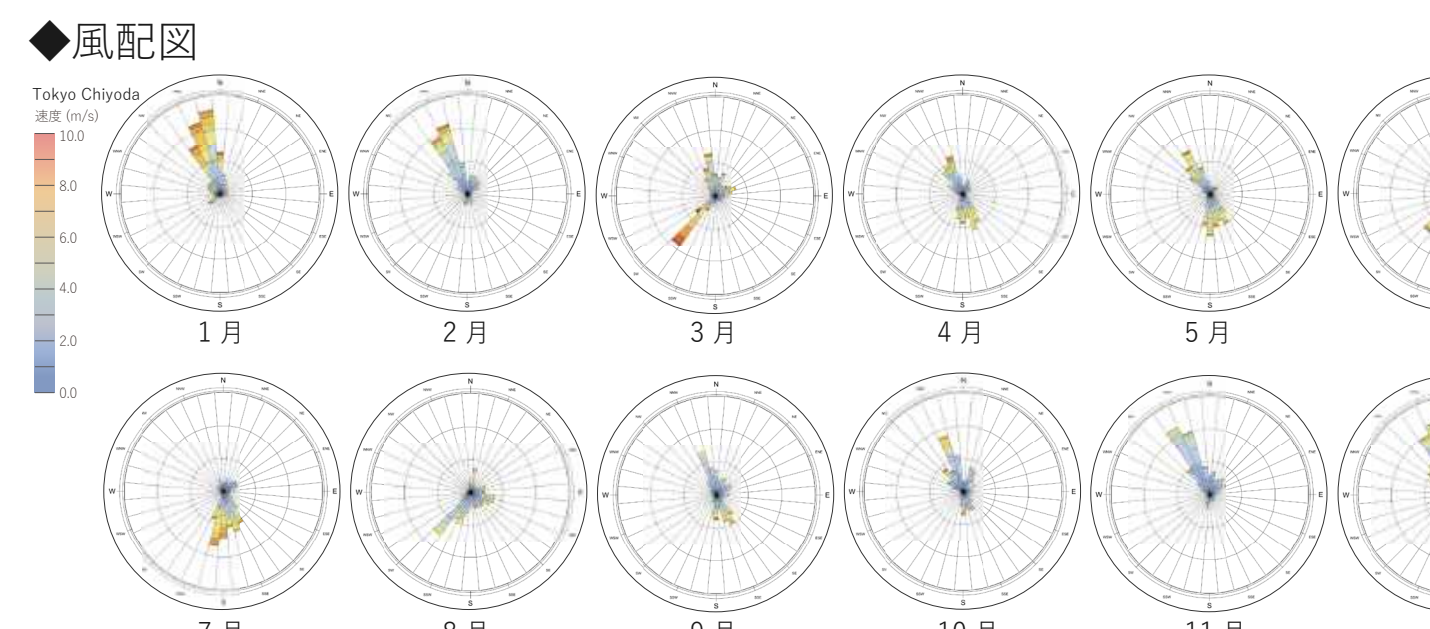
◆対象敷地
多くの環境や人が集まり情報過多な都市空間である新宿を対象敷地とする。新宿御苑を目の前とした開けた部分と高層ビルに囲まれた閉じた部分のある特殊な敷地であることが読み取れる。



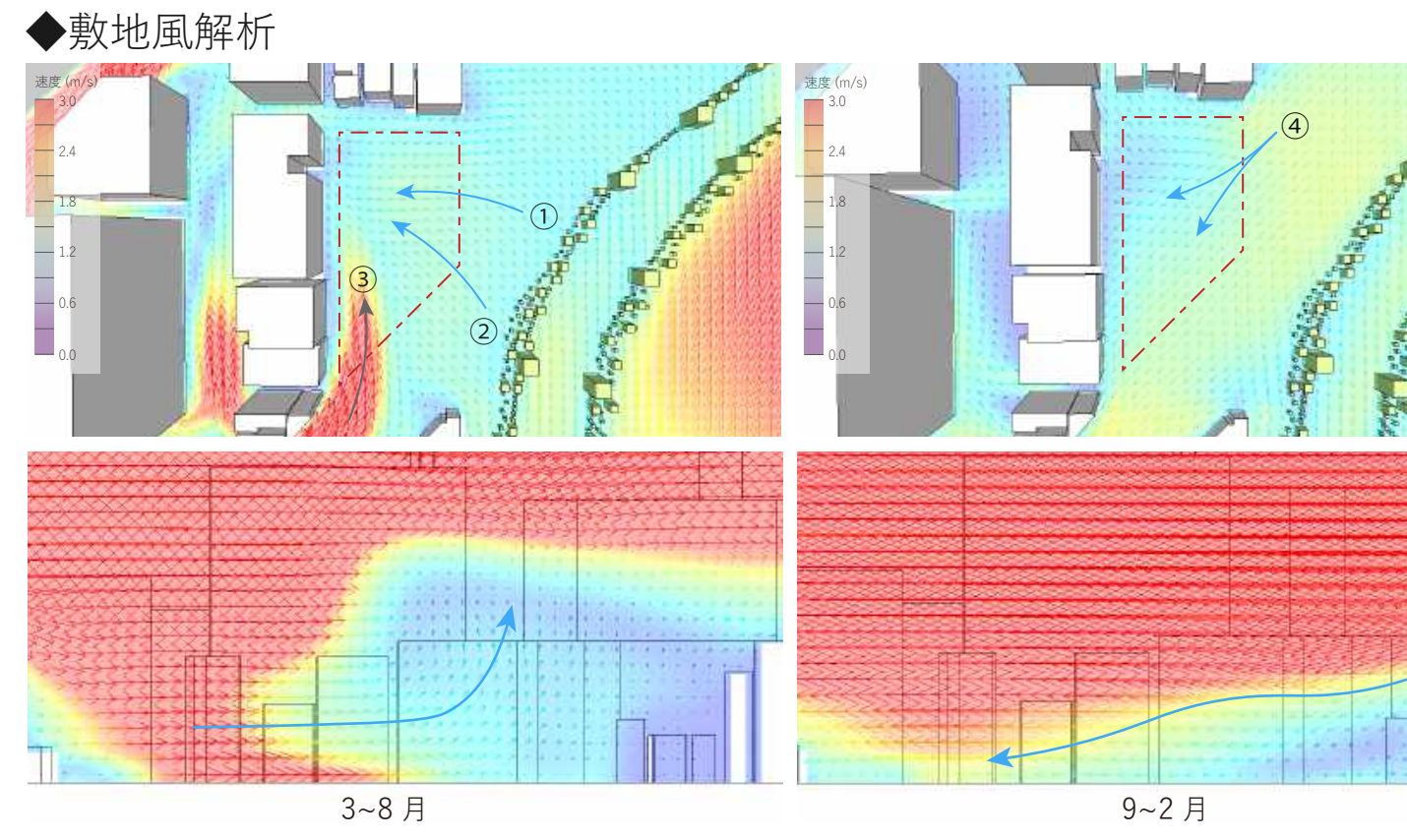
◆新宿の五感の抽出
自分自身と向きあう瞑想を行うためには、何か一つのこと集中し心を静め無心になることが必要であると考えた。一つのこと集中するには**五感の刺激が必要であると考え、新宿の五感の要素を抽出し建築に取り込みデザインを行った。**



Phase0-3. 敷地風環境



卓越風は、**3月～8月は南南西、9月～2月は北北西の風**が吹く。夏は南からの心地よい風を取り入れ、冬は北からの冷たい風を抑えたい。

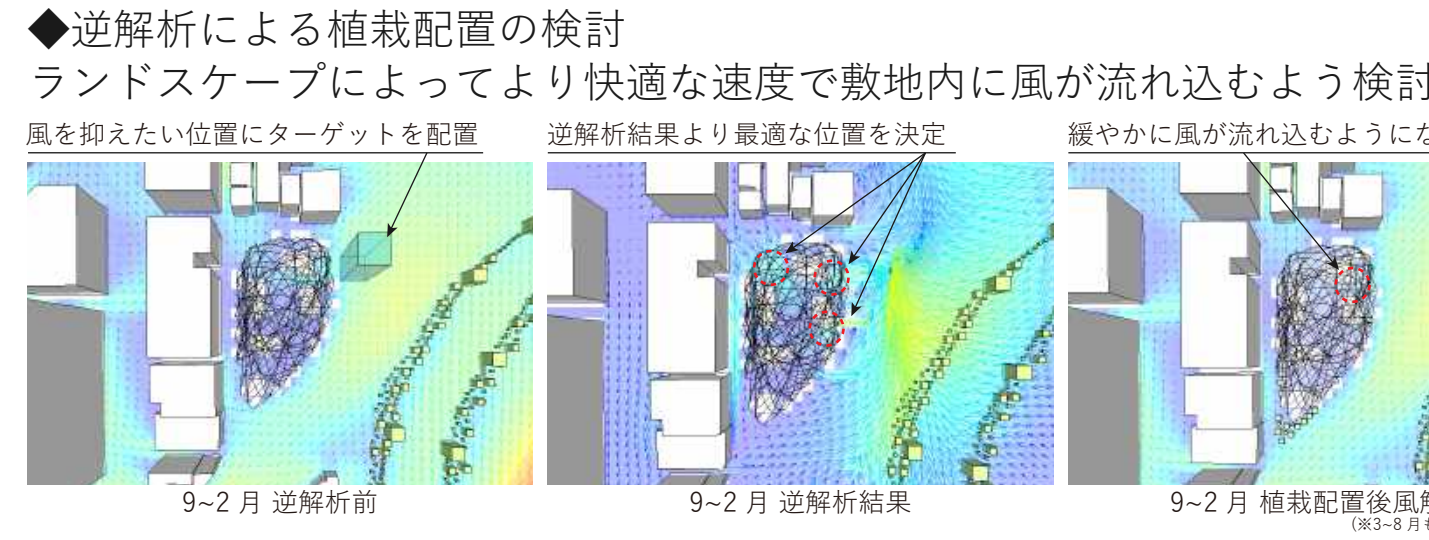
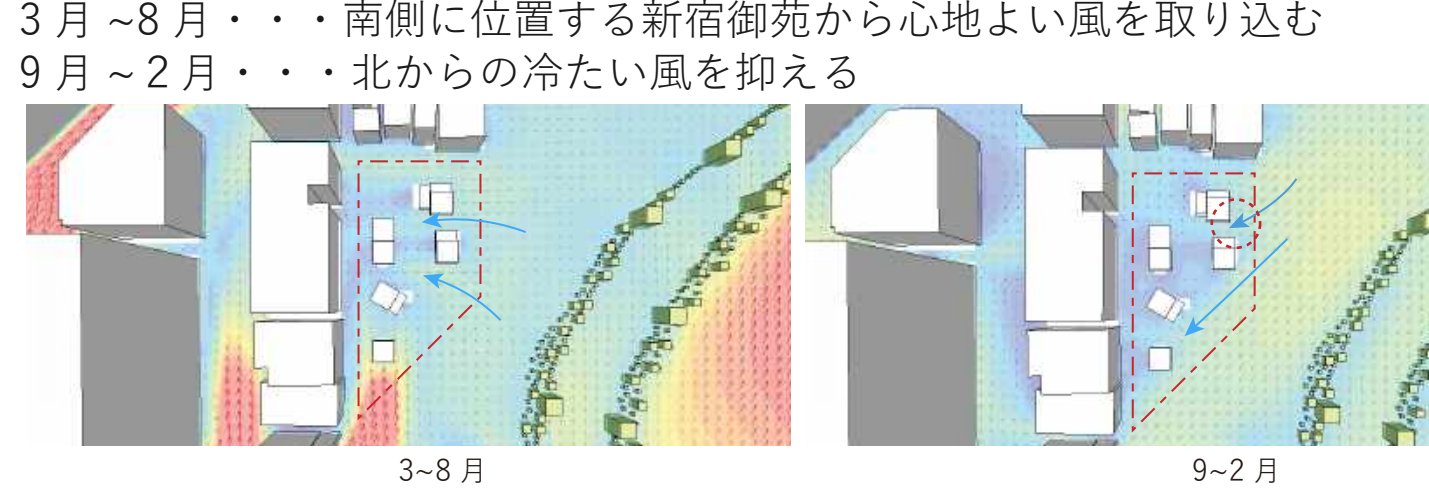


3月～8月では東側から西側へと敷地に並行に吹く風(①)、新宿御苑から敷地に斜めに切り込む風(②)があり、南側の道路からは強く風が吹き込む(③)。9月～2月は北からの冷たい風が敷地内に一様に広がる(④)。

Phase1-1. 瞑想ルームの配置検討

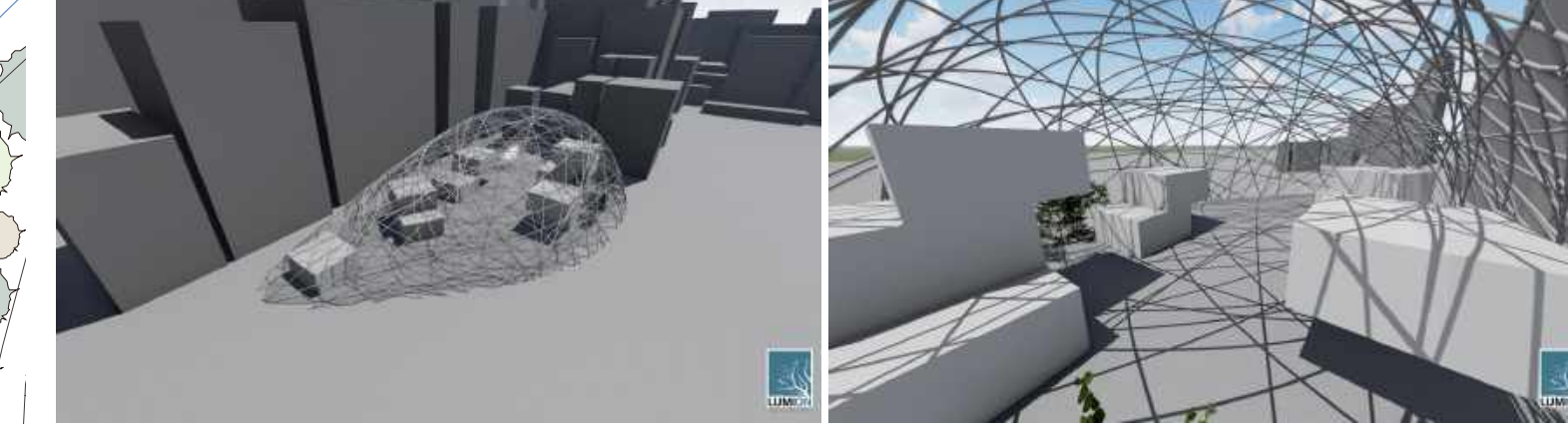


◆ゾーニング
周辺環境との関わり、瞑想ルーム内でのふるまいを考慮し、敷地の環境解析をもとにゾーニングを行う。



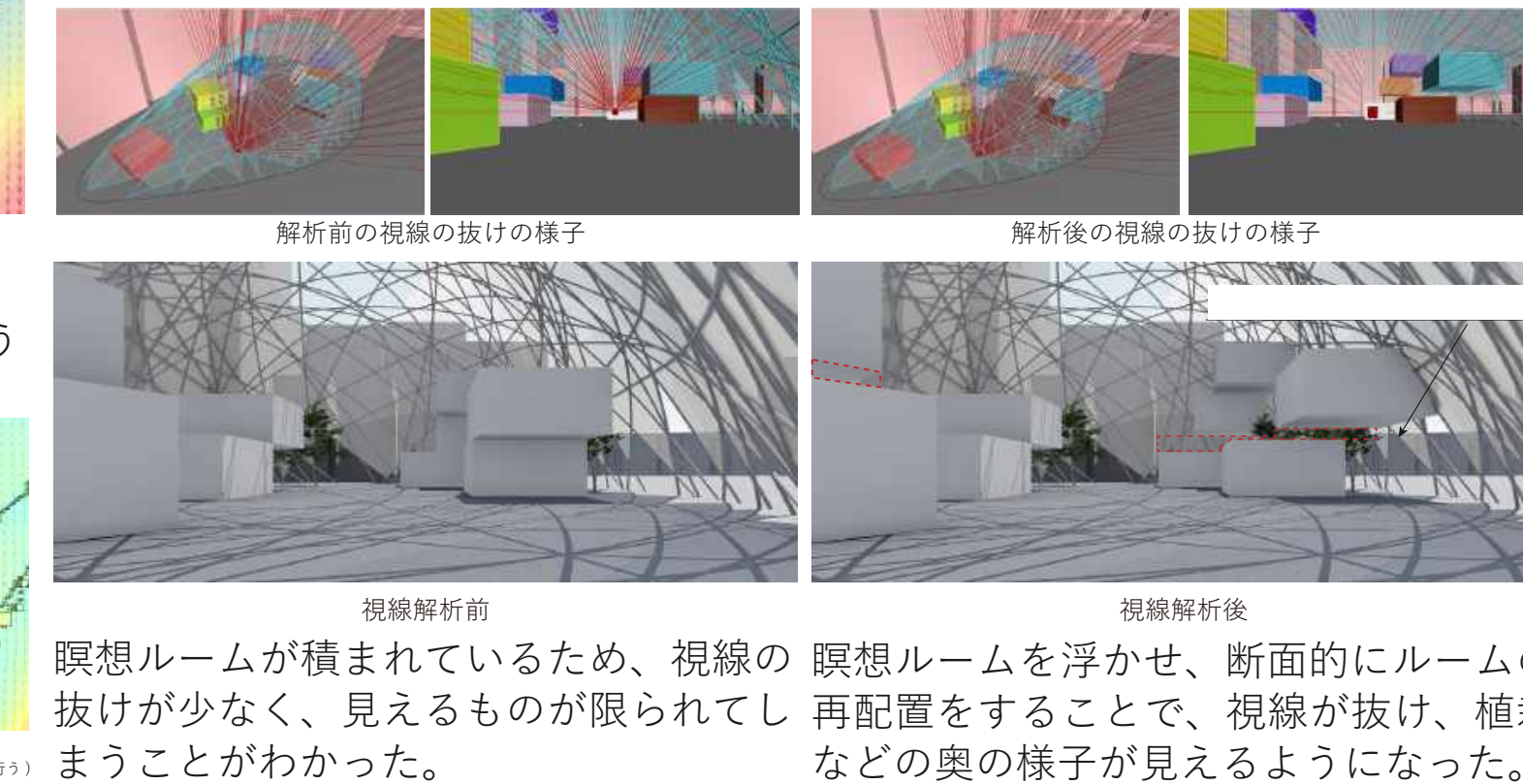
Phase1-2. 初期案作成

◆初期案作成
ここまで解析を行った気象条件や敷地環境、建築コンセプトを考慮し、初期案として瞑想ルームの周りに巣のようなデザインで空間を包み込む外皮を持つ形態を設計した。ここから詳細な解析によってプランを詰めていく。

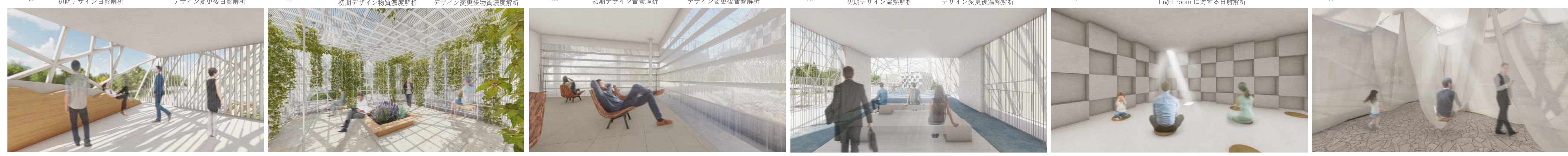
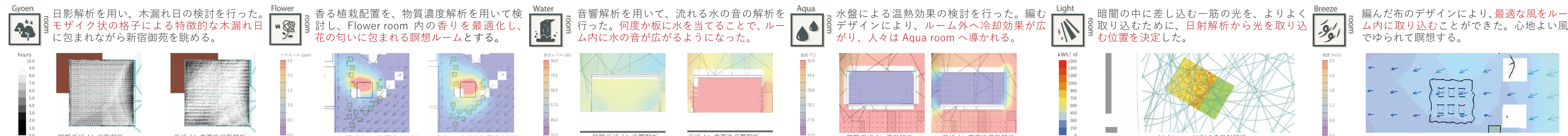


Phase2 視線解析によるルーム再配置

◆視線解析
瞑想ルームに入る前の中間領域では、見えるものの変化から多様な空間体験をしてもらう場である。そこで、Rhino+Grasshopperを用いた視線解析を行った。

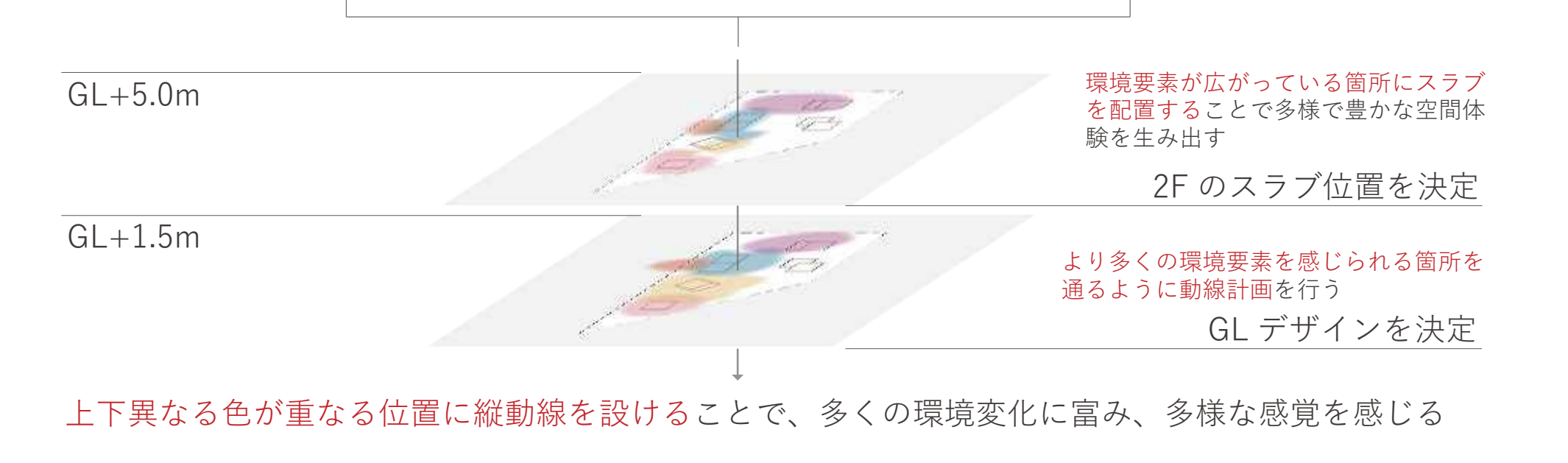
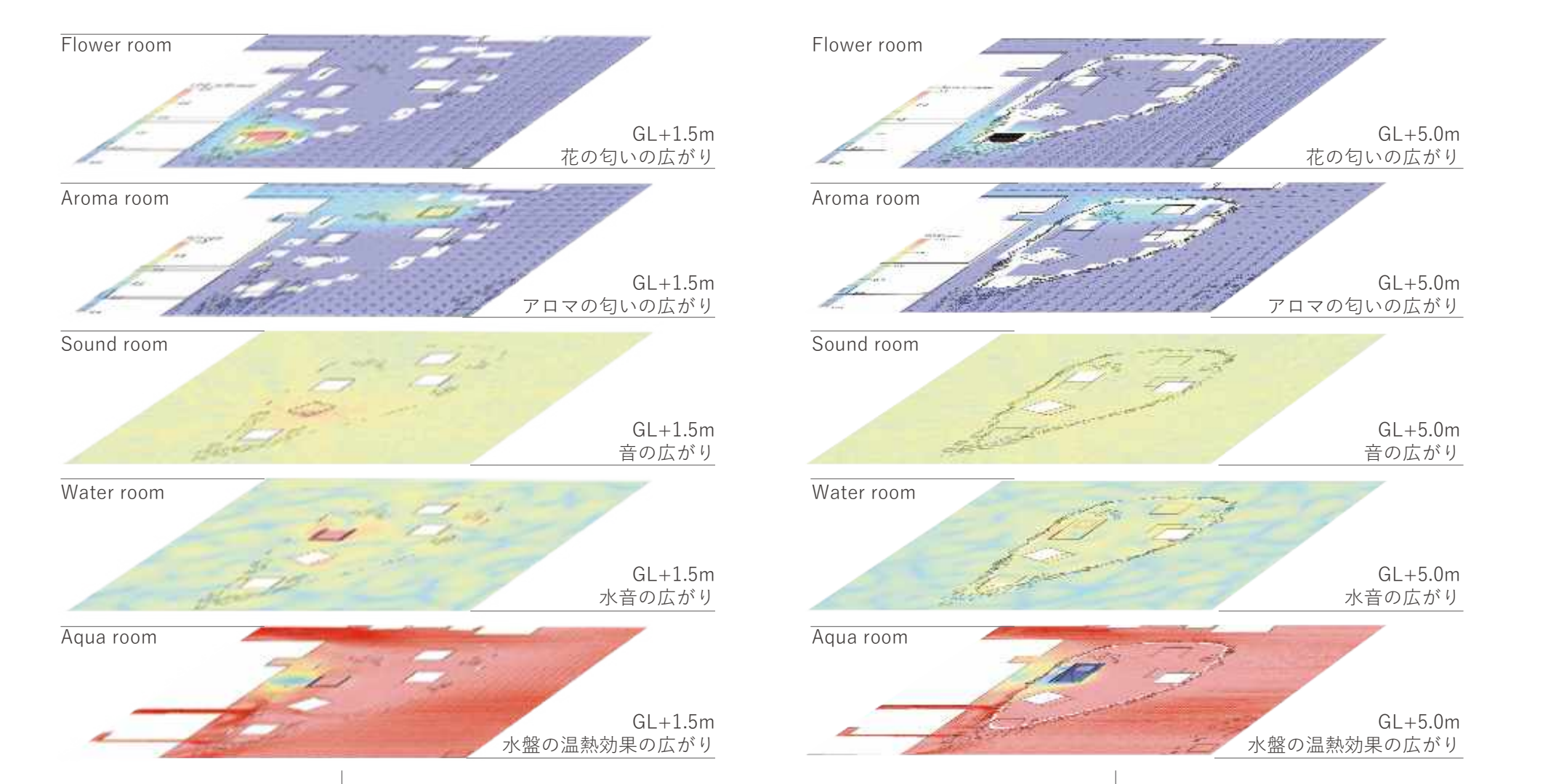


Phase3. 環境解析を用いた瞑想ルームのデザイン



Phase4 環境要素の広がりから中間領域をデザイン

各瞑想ルームから滲み出る環境要素の広がりを重ね合わせ、中間領域のデザインを検討する。グランドレールと2階に人が立ったことを想定し、GL+1.5m と GL+5.0m で解析を行い、デザインを決定した。



Phase5 外皮検討

糸密度の操作により、日射取得・日射遮蔽したい箇所を日射解析より検討を行う。また、開口検討で断面的な室内通風を風解析より検討し、外皮の環境装置としての役割を最大限活かすための最終フェーズである。

